【小説部門・佳作賞】

紡ぐ

筑紫女学園高等学校　３年　師岡　杏奈

　十月の少し冷たい空気が僕の頬を掠めた。上着を持ってくればよかったと後悔しながら、冷たくなった指先をてのひらで包む。赤や黄色に色づいていく木々を見ながら、僕は今日の目的地である福岡市博物館までの道のりを急いだ。

福岡市博物館は、シーサイドももちの中央、福岡タワーを背にして建っている。金印をはじめ、海外との交流を中心に展示を行なっている。奴国から現代の福岡の歴史と暮らしがわかる常設展示や、企画展示など、たくさんの魅力に溢れているが、今日の僕の目的は、福岡市博物館の中にある〈はかた伝統工芸館〉だった。はかた伝統工芸館は、福岡市を代表する伝統的工芸品である博多織、博多人形など、博多ゆかりの工芸品を展示、紹介する観光スポットだ。

エントランスを通り抜け、迷いなく二階への階段を上り、少し歩くと、はかた伝統工芸館の入り口が見えてきた。中に入ると瞳に収まりきらないくらいたくさんの工芸品が並び、どこから見ようかと迷ってしまう。

そんなとき、ひとつの博多織に目が釘付けになり、思わず立ち止まった。縞模様のような柄に、なんとなく懐かしさを覚えながら説明書きを見ると、「献上柄」と書かれてあった。どうやらその模様は、仏具の「独鈷」と「華皿」の結合模様と、中間に縞を配した一定の模様に固定されているらしい。もっとよく見ようと腰を少し屈めた時、背後から肩をたたかれ反射的に振り返った。そこには、見知らぬ老人が、僕の方を見つめて立っていた。動きやすそうなスラックスにジャッケトを羽織っている。帽子を目深に被っているその男性は、不思議な存在感があった。何歳だろうか。顔に刻まれた皺とは裏腹に、足腰はしっかりしていて杖も持っていない。

「……のか」

「はい？」

その老人の喉の奥から掠れた声が響いてきたものの、聞き取ることができず思わず聞き返す。

「……工芸品に興味があるのか」

二度目で聞き取ることができたことに安堵したのも束の間、質問に答えなければと言葉を探した。

「はい、ここにある工芸品は、福岡にとって絶やしてはいけない、大切なものだと思うんです。だから、もっと知りたいと思って」

精一杯に答えたものの、老人からは何も返ってこない。沈黙のせいで、真面目に答えすぎたかと自分自身で恥ずかしくなった。すると、僕の言葉を無言で聞いていた老人は、しばら

くしてから満足げに頷いた。
「君、名前は？」
「中野颯です」
　しどろもどろになりながらも、見つめられている瞳を逸らすことなく返事をした。この人は、一体誰なのだろうか。それになぜ、僕に声をかけたのだろう。他にも人はたくさんいるのに。そんな疑問が頭の中に飛び交う。
「俺は、広瀬稔だ。……親父の後を継いで、博多織職人をしている」
　僕は、耳を疑った。まさか、そんなにすごい人がこの場にいるなんて。驚いて老人を、広瀬さんを見つめる。言葉が出なかった。
「そんなに食い入るように見つめなくても。私は芸能人ではないぞ」
　おかしなものを見たかのように笑いながら広瀬さんに言われ、穴が開くほど凝視していた自分が恥ずかしくなって目を逸らした。すると広瀬さんは目をすっと細めて柔らかな笑みを浮かべた。
「颯くんは、ここで行われているワークショップや講演会に参加したことはあるかい？」
「いえ、ありません。小学生の時に授業の一環で、博多人形の絵付けをしたことはありますが……」
　思い返してみれば、あの時の体験が、僕が工芸品に興味を持ったきっかけだったかもしれない。
「十一月にあるワークショップに参加したいと思っていたんですが、予定が合わなくて」
　十一月の最初の休日に行われる「作る、使う、学ぶ」をテーマにした人気のイベントは、はかた伝統工芸館が百道浜に移転してから初めて行われるワークショップだ。博多織や博多人形、博多張子などの工芸の制作体験や物販が行われる。
「残念ですけど、また別の機会に……」
　目を伏せて申し訳なく思いながら言葉を紡ぐ。僕の方を無言で見つめる広瀬さんを直視できなくて、気まずさから上げかけた視線を再び落とした。それからしばらくして、広瀬さんがおもむろに開いた口から滑り出た言葉は、僕が思ってもいないものだった。
「颯くん、来週の日曜日空いてるか？」

＊

　ガタンゴトン……、電車が走る音を聞きながら、僕は窓の外の見慣れない景色をぼんやりと見つめていた。
　あの日、僕は広瀬さんに仕事場を見学してみないかと誘われた。驚きすぎて言葉が出なかったが、顔に刻まれた皺をより深くさせながら笑う広瀬さんを見つめていると、いつの間にか頷いてしまっていた。
　僕の家から電車で五駅、それからバスに乗って少しだけ山間に入ったところに、広瀬さん

の仕事場はあった。年季の入った木造の家屋は、博多織についてほとんど知らない僕にとって近寄りがたさを感じたものの、人を歓迎するかのような暖かさが、なんとなく感じられた。
　実を言うと、ここに来るかどうか僕は迷った。僕にとって広瀬さんは会って間もない人で、それは広瀬さんにとっても同じだ。大して親しくもない人間に、どうしてここまでしてくれるのかがわからなかった。仕事場を見せてくれると言ったのは広瀬さんだけれど、迷惑になるのではないか、あの時僕は遠慮して断るべきだったのはないか。しかし、行くと約束しておきながら行かないのも失礼になる。そんなことを広瀬さんと別れてから今日までの一週間、ずっと考えていたものの、結局この場に来てしまった。
「おはようございます……」
　恐る恐る工場の中へ足を踏み入れ、誰にというわけでもない挨拶が唇から溢れる。それから目の前に広がった光景に息を呑んだ。
各々の作業に集中している作業員の姿。手織り機やさまざまな種類の博多織が所狭しと並んでいる。その迫力が、その場の温度を少しだけ高くしたように感じられた。
「すごい……」
　僕の喉から乾いた声が溢れ落ちた。すると目の前に、作業着姿の広瀬さんの姿が目に映った。
「おお、颯くん。よく来たね」
　僕を誘ってくれた広瀬さんを視界にとらえたとき、その場の空気に気圧されて高鳴っていた心臓の鼓動が、少しだけ落ち着いていくのを感じた。
「広瀬さん、おはようございます。今日はお忙しい中、僕のために……」
「ああ、そんなに硬くならなくて大丈夫だよ。誘ったのは私の方だしね」
　慌てて頭を下げてお礼を言った僕の声を遮って、広瀬さんが楽しそうに言葉をくれる。その優しさに込み上げてくるものを感じながら、僕はもう一度、深く頭を下げた。
「さて、早速だけど、博多織について少し説明しようか。博多織が、日本三大織物の一つだということは知っているかな？」
　僕は静かに頷いた。反応を確認してから、広瀬さんは再び口を開いた。
「博多織は、たくさんの経糸に、細い糸を数本まとめ合わせた太い横糸を力強く打ち込んで作られる絹織物だ。一九七六年に国の伝統工芸品に指定されている。
　鎌倉時代の商人、満田彌左衛門が、宗で習得した織物の技法を、一二四一年の帰国後に、独自の意匠を加えて制作したものが、博多織の起源と言われている」
広瀬さんの話を、僕は異国の話でも聞くかのような気持ちで聞いていた。博多織について強く語る広瀬さんの姿は、僕にとって格好良く、眩しく映った。

　博多織ができるまでには、たくさんの工程を必要とすると、広瀬さんは教えてくれた。日本の四季や風習が表現されている、これまで継承されてきた文様や、新たな図案を組み合わせた図案の作成。その次に、方眼紙にたて糸とよこ糸の交差具合を示す織組織を書き起こす

意匠。生糸の油分や汚れを取り除いて柔らかな絹糸に仕立てる精錬。精錬した糸を染め上げる染色。それから糸繰りや整経など、数えることも大変なくらいだった。
例えば、一本の帯を制作するのには、一本一ミリメートルにも満たない幅の糸を一万本以上使用する。数ヶ月から半年程度かかるものもあるそうだ。
　各工程が分業体制とはいえ、気が狂いそうなほどの時間と労力がかかるということを知った僕は言葉が出なかった。
「一つ仕上がるのに、こんなに綿密で繊細な作業がずっと続くんですね……」
　僕には、これほど気力と体力を使う仕事をこなすことはできないだろう。一週間や一ヶ月じゃない。ずっと続くのだ。
「あの、どうしてこのお仕事を始めたんですか？」
　軽い気持ちでは決して務まらない。どれほどの覚悟があったんだろう。僕の言葉を黙って聞いていた広瀬さんは、少し考えるようなそぶりを見せた後、ゆっくりと話し始めた。
「親父も博多織職人だったということが大きいかな。その影響で私も小さいころから、博多織が作られている工程をよく見ていたんだ。小さいながらに、俺もこの仕事をするんだって思いこんでいたのかもしれん」
　昔を懐かしむように目を細め、遠くを見た広瀬さんを、僕は黙って見つめていた。それから視線を僕の方に戻してから、にっこりと笑みを浮かべた。
「でも。今は違うよ。この仕事に誇りを持って一生懸命やってる。使う人のことを考えて、少しでも喜んで欲しいと思って仕事をすることはとても楽しい」
　ここにいる、全員がそうだ。そう呟いて、工場内をぐるりと見渡す。お互いがお互いを信用して、助け合っているからこそ、今、この空間は成り立っている。
「博多織は、今までの、そしてこれからの福岡を語って、創っていく中で、なくてはならない存在だ。私たちは、この伝統を絶対に絶やしてはいけないんだ」
　でも、と意思と希望に溢れた表情をしていた広瀬さんの顔に影が落ちる。それとほぼ同時に、先ほどまで晴れ渡っていた空に、暗い雲が覆っていくのを、窓越しに視界に捉えた。
「博多織は、しなやかで丈夫だから、締めやすく、緩みにくい。その特性から特に『帯』として高い評価を得ている。だけど、近年着物が売れなくなってきていることは、知っているかな？　日本人の着物離れや後継者不足から窮地に立たされているんだ。だから、そのことは博多織にも影響を及ぼしている」
　寂しそうに、出来上がった博多織の数々を見つめている広瀬さんを見ていると、胸が痛んだ。
　どれくらい経っただろうか。長い時間を過ごしたような気もすれば、一瞬だった気もする。いきなり手を一つ叩いた広瀬さんに驚き、我に返った。
「さぁて、話はこれくらいにして、染色でもやってみるかい？」
　腰かけていた椅子からゆっくりと立ち上がって、広瀬さんは楽しそうに笑った。

博多織は、糸を先に染める先染めの織物なので、色見本に合わせて染色を作る。染料は天然染料と化学染料、染める方法も、機械染めと手染めがあるが、せっかくの機会なので僕は手染めを選んだ。広瀬さんがお手本として見せてくれた通りに作業をしたつもりだが、思うようにいかない。
「あれ、ぜんぜん綺麗な色が出ない……」
「そりゃあ、色見本通りの色を出すには熟練の経験がいるからなあ」
がはは、と豪快に笑う広瀬さんを見ていると、できると思っていた自分が恥ずかしくて顔が赤くなっているのが自分でもわかった。
「ちょっと、貸してみんさい」
広瀬さんの手に変われば、先程まで綺麗な色が出なかったのが嘘のように、どんどん染まっていく。
その魔法のような光景に目を奪われていた時、周りの職人さんたちが手を止めてこちらを見ていることに気づいた。
「広瀬さんって……」
視線を彷徨わせている僕に気づいた広瀬さんは、作業する手を止めることなく答えた。
「この工場の中じゃあ、俺が一番の古株だからね。まだまだ他の人には負けないよ」
額に滲んだ汗が今にも零れ落ちそうになっている。それほど、この空間は熱かった。いいものを作るという意思と熱気に溢れ、あたりを覆い尽くしていた。

少し休憩しよう、といった広瀬さんに連れられて、湯呑に注がれたお茶を片手に、部屋の隅にあるパイプ椅子に腰掛けた
「実はね、颯くんを誘ったことを、少しだけ後悔していたんだ」
しばらくの沈黙の後、そう言った広瀬さんの言葉に、息が詰まった。やはり迷惑だったんだと悲しくなって下を向く。
「颯くんみたいな若者が、工芸品に興味を持ってくれていたことが嬉しくてね」
え、と僕の喉から乾いた声が漏れ出る。
「あの場所で、若者が一人で工芸品を見ている。そんな光景、見たことなかったから驚いた。本当は、そっとしておくつもりだったんだ。でも、気づいたら声をかけてしまっていた」
申し訳なさそうに眉を下げて笑う広瀬さんを見ていると、僕の空っぽだった心が、何かで満たされていくような感覚を覚えた。
「無理を言って……、迷惑をかけてごめんね」
「迷惑なんかじゃありません！」
僕は、広瀬さんの声を遮って叫んだ。自分が工場にいることなんて、忘れてしまっていた。
「僕は、小学生の時に出会った福岡の工芸品を見て、物の見方が変わったんです。僕がこれまで気に留めていなかった日本の文化の大切さについて教えてくれたのが……工芸品だから。だから、そんな悲しいこと、言わないでください」

僕はそんな風に思っていない。それを、知って欲しかった。
「そう言ってくれると、とっても嬉しいよ」
広瀬さんの瞳に微かに滲んだものがあるのを、僕は見逃さなかった。それに、と僕は言葉を続けた。
「一つ、思い出したことがあるんです」
そう言うと、首を傾げて訝しげな表情で見つめられる。
「僕の祖母が大切にしていた着物と、手拭いがあるんですけど……、その柄が、今僕の目の前にあるこの織物の柄と似ているんです。いや、似ているなんてものじゃない。同じだ」
自分に言い聞かせるかのように、さっき頭の中に浮かんだ言葉を繰り返す。あの日見た、「献上柄」の織物。まさしくそれが、目の前にあった。
「気づいていないだけで、博多織は僕たちのそばにあって、心を照らしてくれている。そんな存在だと、僕は思います」
広瀬さんの瞳を見て、僕は言葉に力を込めて伝えた。
そうか、と言ってから、広瀬さんが少し下を向く。その時、僕は、確かに見た。涙を零さまいとしていた広瀬さんの瞳から、一筋の涙が零れ落ちているのを。それに気づかないふりをして、僕はゆっくりと流れていく時間に身を預けた。

＊

伝統を守るだけでなく、今を生きる人々に届くように、現代の感性を汲みとりながら、止まることのない文化の発展に携われる人になりたい。それが、今の僕の夢だ。
そんなことを思いながら、僕は広瀬さんの働く工場をもう一度見つめた。それから背を向けて、バス停に向かってゆっくり歩き出す。
僕の手には、「お土産に」と広瀬さんが渡してくれた博多織のポーチが入った袋が握られている。今や博多織は、小銭入れやネクタイ、名刺入れにも使われているそうだ。大人になったら、またここに買いにこよう。そう決心して、もう一度ポーチに視線を落とした。それを見ていると、心が温かくなり、足取りが軽くなっていくのを感じた。
秋の始まりを告げる柔らかな風と、沈み始めた夕日が、僕の背中を押してくれるような、そんな気がした。